

禅茶の思想

池田 豊人

村田珠光によって創唱された佗茶道は、武野紹鷗に継承され、千利休によって大成された、香り高い日本文化である。

『南方録』第一巻の覚書に「宗易の云、小座敷の茶の湯は、第一仏法を以って修行得道する事也。家居の結構、食事の珍味を楽とするは俗世の事也。家はもらぬほど、食事は飢ぬほどにてたる事也。是佛の教、茶の湯の本意也。水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたてて、仏にそなへ、人にもほどこし、吾ものむ、花をたて香をたく、みなみな仏祖の行いのあとを学ぶ也。」と、利休の言葉が主体となつて、奥ゆかしい真人（しんにん）を形成し、幽玄な文化を創造してゆくものでなければならぬ。

そこに一貫し、徹底している思想は、禅茶の思想であり、真茶の哲学である。禅茶は真茶の道なのであって、茶の湯の在りようを示し、方向を指示してやまないものである。

千利休は南坊宗啓を相手に、当時の茶の湯界の有様を語

り、「只今さえ思の外なるふるまい多し、ましてや末代の茶思いやられて是非に及ばず。百年の後、ふたたび生れて、世間の茶成はてたるありさま見たきことなり。云云」。又、「十年を過ぎず、茶の本道捨るべし。すたる時、世間にては却而茶の湯繁昌と思べき也。ことごとく俗世の遊事に成りてあさましき成はて、今見るがごとし、かなしきかな」とのべている。（『南方録』滅後）

利休在世当時、茶の湯は大いに繁昌したもののようであるが、元禄時代から、文化、文政の頃にかけても、茶の湯人口の激増期であり、烈しく大衆化の行われた時代であった。利休の滅後、二百年前後のことである。

『南方録』は、立花実山によって世に出たが、『実山本』の後二巻の書写は元禄三年（一六九〇）であり、利休居士百年忌祥当の年であったことから、実山は大いに感じ入った旨を記している。

文化年間といえは、利休の滅後二百年頃であり、元禄十二

年に貝原益軒が著した『茶礼口訣』をはじめとして、「茶道を排斥したる書あまた世に出で……」(『禪茶録』)る有様であった。

そのような時代に、佗茶道の真意を明白にすべく『禪茶録』が著され、利休居士によって大成された佗びの茶の湯は、「禪法の真味と他事なき」ものであることを主張したのである。

『禪茶録』は、「茶事は禅道を宗とする事」、「茶事修行の事」、「茶の意の事」、「禪茶器の事」、「佗の事」、「茶事変化の事」、「教寄の事」、「露地の事」、「体用の事」、「無賓主の茶の事」、の十章にわけて、随处にその思想を敷衍している。そのいちいちについて論じる余白はないので、ここでは「露地」の章について述べることにする。

「露地の事」 (本文)

今の世俗、庭を指して内露地・外露地と称すれど、義理に於いて甚だ相違せり。本と露地とは、露はあらわると訓じ、地は心を云えり、此れ自性を露わすの義也。一切の煩惱を離断して、真如実相の本性を露わす故に、露地という。又、白露地と云も同じ。白は清浄なるを云えり。此の儀を取来って、茶室は本性を露わす道場ぞと云う意にて、露地とは名づけたるなり。故に露地は、茶室の一名なり。又、不毛の赤地の広莫にして潔浄なるをも、露地と号す。是れ亦、本性に況へたるなり。法華の注に、四衢道中は

四諦に譬ふる也。其の四諦觀を以って、同じく見諦を會し、夫の路頭の如く四衢と名くる所以也。若し見惑を除くと雖、思惟仍お在れば、則ち露地と名づけざる也。若し三界の思い尽くれば、方に露地と名づくるのみ、云云。

又、道場と云えるも、露地と同義也。止觀に、道場は即ち清浄の境界也。五任の糖を治めて実相の米を頭わす、云云。是の如く三界の思い尽くるを方に露地と名づくと出たり。故に五任の煩惱の糖を治め、実相清浄なる本性の米を頭わすと云う意にて、露地と云ひ、道場と云うも、異なることなし。又、茶室を別世界など云う、是れも自心と比したり。語に、世界は世界に非ず、是れを世界と云う。「心無所住而生其心」(おうむしょじゅうにしょうごしん)なるべし。

(※) 少しだけ読み易くした。糖は糠の誤字。尚、「止觀」とは『摩訶止觀』のこと。「五任」とは「五任地煩惱」のこと。「語」とは『金剛經』を指している。

「露地の事」 (意訳)

現今の世間では、庭のことを指して内露地・外露地と云うけれども、意味を大きく取違えている。本来、露地とは、露はあらわると訓み、地とは本地すなわち心のことを云うのである。これは、本来の自己の本性を露わすという意味である。一切の煩惱を離れて、真如実相の本性を露わすことを「露地」と云うのである。又、白露地(びやくろじ)と云うのも同じことである。白は清浄なることを云うのである。この意味から、「露地」と名づけ

たのである。だから、露地とは茶室の別名なのである。又、不毛の赤地の広莫にして潔淨なることも、露地とよぶことがあるが、これも亦、本来の自性にたとえたのである。

『法華経』の注に、四衢道中とは四諦を譬えているのである。その四諦觀をもつて、同じく見惑を会得すれば、かの街頭のように四衢と名づけるわけである。もし、見惑を除くといえども、なお思惑があるのなら、それは露地とはよばないのである。もし、三界（欲界、色界、不色界）にわたる思いが全くなくなれば、そこを露地というのである云云。

道場というのも、露地と同じ意味である。『摩訶止観』に、道場は即ち清淨の境界である。五住地煩惱の糠をおさめて、実相の米を顯わすところである。云云と、あるように、三界にわたる思いがなくなつたところを「露地」と名づけると云われている。従つて、五住地煩惱の糠をおさめて、実相清淨なる本性の米を顯わすという意味であつて、「露地」と云い、「道場」というのも同じことである。

又、茶室を別世界などと云うのも、自分の本心にたとえて云うのである。

『金剛經』に、「如来の説き給う所の三千大千世界は即ち世界に非ず、是れを世界と名づく」と説かれており、又、「声、香、味、触、法に住して心を生ずべからず、応に住する所無うして、而も其の心を生ずべし」とある通りである。

『壺中爐談』（松月庵橋実山著）には、「露地」について次

のような記述がある。

「露地は草庵寂寞の境をすべたる名なり。法華譬喩品に長者諸子すでに三界の火宅を出て、露地に居ると見えたり。又露地の白牛（びやくご）という。白露地（びやくろじ）ともいへり。世間の塵勞垢染を離れ、一心清淨の無一物底を、強いて名づけて白露地という。しかれば、本来の心地にして、其心地の外相は、樹石天然の一庭なり。一鳥不啼、雲埋老樹ごときの佳境なり。云云。又、『南方録』秘伝には、茶の湯の核心の境界を、懇切にしかも高い理念に基いて、格調高く堂々と展開している。

「山水、草木、草庵、諸具、賓客、庵主、歴然として前にあり、後（しりへ）にあり、其の規矩、法式、物々、事々に、そなわること勿論なり。其の置方、并に手前の取さばき、師伝万般にして、のがるるに所なしといえども、只根本の規矩、陰陽の五六、小カネの七ツ、一尺四寸、一尺八寸五分、と云う一句に在つて、千變万化、自由自在なり。五十、六十のかざり、所作、は只是枝葉の至りなり、本規に至るべきとの階子なり。又、大秘事と云は、かの山水、草木、草庵、主客、諸具、法則、規矩、ともに只一箇に打擲し去つて、一物の念なく、無事安心一様の白露地、これを、利休宗易大居士、的伝の大道と知るべし」

佗びの茶道の究極は、ここに尽きると云つても過言ではない。ただ、文言をあやつるだけで、その真意を会得してないところに問題があるのである。利休在世当時に、すでにそうであつたのだから、百年後、二百年後と警鐘を鳴らしても

無駄なかも知れない。家元ご用人が「露地は路地である」として、路地を露地にした利休居士の真意を会得しようとしてない風潮さえみられるのである。

「無事安心一様の白露地」が理解できなければ利休居士の佗びの茶の湯は会得できるものではない。

「無事」（ぶじ）とは無事は貴人底の無事である。この世間に事がないということはあり得ない。ただ、身の上にいかなる事が起っても、すべてを肯定して受けとめ、積極的に相対する主体的自己に「事は無い」のである。そして、あらゆる物が光り輝いて自分を包んでくれる「真人」こそ「無事は貴人」である。

「白露地」に対しては「白牛」（びやくご）の語があり、「露地の白牛」という用語もある。「露地」に「白牛」が居るわけであるが、「白露地」は仏の浄土であり、「白牛」は仏そのものである。この二つは、二つであって一つである。その二つを「只一箇に打擲し去って、一物の念のない」ところ。そこが「無事安心一様の白露地」なのである。

茶の湯の場には、「山水、草木、草庵、諸具、賓客、庵主」が、歴然として前にあり、後にあり、そこには皎然とした規矩もまたある。「其の置方、并に手前の取さばき、師伝万般にして、のがるるに所なしといえども、只根本の規矩、陰陽の五六、小カネの七ツ、一尺四寸、一尺八寸五分、云一句に

在て、千変万化、自由自在なり、五十、六十のかざり、所作は只枝葉の至なり。本規に至るべきとの階子なり」とある。その階子を経て、「白露地」がつくり出され、「白牛」がそこに居るのである。ここが「無事安心一様の白露地」なのであるが、「白露地」と「白牛」が「一様」なのである。二つが全く一つになってそこにあるのだから、まさに「無事」「安心」である。このように「露地」を理解し、体得されるべきものなのである。

これは、佗茶の湯の中にこめられた「禅法」であるが、『禅茶録』は、佗びの茶の湯は、「禅法の真味と他事なき」ものであり、なければならぬと、強調してやまないのである。

ただ、この「無事安心一様の白露地」を体得することは、単なる知識や観念などで出来るものではない。山火、草木、草庵、主客、諸具、法則、規矩を修練した尽くして、百尺竿頭より一步を進めて、身心脱落するより他はないのである。教えることもできなければ、伝えることも出来ないものである。「一子相伝」ということがあるが、これは究極のところは何も教えないことであり、教えられるものではないということである。本人の努力によって触発されて会得したものが、本当の「一子相伝」であるのだろう。教えられ、伝えられたものではないから、忘れることもない究極であろう。こ

これらのことは、あらゆる芸道にも通じる哲理であることは間違いない。

『法華経』では、「白露地」は火宅から脱した世界としてゐる。火宅が白露地に転ずるのである。これが本当の宗教の「安心」（あんじん）なのである。利休居士的伝の大道は、まさにこの「安心」なのである。

宗教者はその求道において、茶の湯者はそのお点前において、この「安心」に至らなければならないが、黙々と徹底することより他に方法はない。掃除に徹することに於いても「無事安心」様の「白露地」は必ずず体得できるものなのである。

谷川徹三氏は『茶の美学』に於いて、修行的なものが、儀礼的なものと矛盾する面と、その逆の場合を考察し、修行的なものとは儀礼的なものは互いに求めあっている、と指摘しておられる。

深い洞察から、茶の湯の現状を思い、向上を求めておられるのであろう。とかく、修行的、理念的なものは、儀礼的なものと反発してしまふところである。『禪茶録』も修行的、理念的なものとして、儀礼的な方からは無視されて来たこと云々も過言ではなからう。

「露地」の一章は、『禪茶録』の中核であり、茶の湯の根本でなければならぬし、禪茶の思想、真茶の哲学そのものなのである。

発表規則について

ご承知のように近年本协会会员の増加によりまして、学術大会の発表者が増大し、当番校の負担が過重になりました。併せて学術大会でご発表の研究を、学会誌に掲載できないことが多くなりました。この二つの難点を解決するために、昭和五十八年六月十二日の高野山大学における理事会で「會員の学術大会における発表は二年に一回以内とする」と決定いたしました。この規則における「発表」とは、学術大会における論文の口頭発表とその雑誌掲載の両者を含むものであり、「二年に一回以内とする」とは、二年連続して発表することができないということを意味すると、昭和五十九年十一月十一日の理事会で確認されました。

付記

一、近年プログラム作成以後に発表を取り消す方が増加し、当番校に多大のご迷惑をおかけしているばかりではなく、学会の有意義な運営上まことに好ましくない傾向でありますので、プログラムに掲載された方は次年度に発表することをご遠慮いただきたいと存じます。

二、当分の間これを原則といたします。